# 万葉図書・情報室だより64号

## 大来皇女、伊勢下向1350年

うつそみの　人にあるわれや　明日よりは　二上山を弟世（いろせ）とわが見む

大来皇女（おおく）

（巻2・165）

―現し身の人である私は、明日からは二上山をわが弟と見ようか。―

父・天武天皇の死後、謀反の罪に問われ刑死した弟・大津皇子を思って姉・大来皇女が詠んだこの歌は『万葉集』の中でも人気の高い歌です。『万葉集』に収められている彼女の歌は6首ありますが、それらすべてが大津皇子にまつわる歌であることからも、二人には深い絆や愛情があったと思われます。

2024年は、この大来皇女が斎王（さいおう、いつきのみこ）として父・天武天皇より命じられ伊勢に下向して1350年にあたります。

では斎王とはなんでしょうか。斎王とは、天皇に代わり天照大神を祀る女性を指し、7世紀後半から南北朝期にかけて約660年存在した制度です。また、その住まい・宮殿を斎宮（さいくう）といいます。『古事記』・『日本書紀』には大来皇女よりも古い時代の人物が記されていますがあくまでも伝承の域を出ず、そのため大来皇女が実在のあきらかな最初の斎王とされています。

壬申の乱（672年）の際、大海人皇子（のちの天武天皇）は伊勢の朝明（あさけ）の迹（と）太川（おおかわ）の畔（ほとり）で戦勝祈願として天照大神を望拝したとされています。そして大海人皇子が勝利を収め、その謝意として大来皇女が伊勢に斎王として遣わされることになったといわれています。

673年4月に潔斎のために泊瀬の斎宮に入り、翌年の10月、「大来皇女、泊瀬の斎宮より、伊勢神宮に向でたまふ」と『日本書紀』にあるように伊勢へと向かいました。この時、大来皇女は数え年で14歳でした。伊勢での彼女の生活は神に仕える静かなものであったと推察されます。

しかし、686年に天武が亡くなり大津皇子が刑死すると大来の生活は一変します。大津皇子について『懐風藻』は「状貌魁悟（じょうぼうかいご）、器宇峻遠（きうしゅんえん）なり」と身体つきは大きく器量もまた優れていたなど、立派なさまを記しています。実際に大津が謀反を企てたのかは諸説分かれるところではありますが、人望のある人物であったのでしょう。大津が処刑されたことにより、大来は斎王の任を解かれ都に戻りますが、その帰路はけっして心弾むものではなかったことが残された歌からも分かります。

神風の　伊勢の国にも　あらましを
なにしか来けむ　君もあらなくに

大来皇女（巻2・163）

―神風の吹く伊勢の国にもいればよかったものを、どうして都に帰って来たのだろう。あなたもいないことだのに。―

1991年に行われた発掘調査により発見された木簡の中に大来の名が記されたものがありました（注・木簡には「大伯」と記されています）。この木簡から、帰京したあとも都に宮を構え、皇族としての待遇を受け生活していたことが推測されます。この木簡が発見された場所が現在、万葉文化館が建つ場所であり、飛鳥池遺跡（飛鳥池工房遺跡）として保存・展示され当時を偲ぶことができます。木簡も複製品ではありますが地下の特別展示室で見ることができますので是非一度ご覧ください。

（司書　藤原文代）

※万葉歌及び口語訳は中西進『万葉集全訳注原文付』による。

〈主な参考文献〉
『日本書紀　五』
（坂本太郎他／岩波文庫）
『懐風藻全注釈』
（辰巳正明／笠間書院）
『伊勢斎宮の歴史と文化』
（榎村寛之／塙書房）
『東雲の斎王　大来皇女と壬申の乱』
（斎宮歴史博物館）

**利用案内**

**図書室のご利用は無料です。**
**閲覧でのご利用になります。**
**開館時間…午前10時～午後5時半**
**休館日…月曜日（祝日の場合は翌平日）・年末年始・展示替日**
**コピーサービス…白黒　1枚10円**
**カラー1枚50円**

**奈良県立万葉文化館万葉図書・情報室**
**奈良県高市郡明日香村飛鳥10**
**0744-54-1850（代）**

R6. 3. 27　VOL.64